

べきであることを示した点で重要と考えられた。

12 当院で経験した肺炎球菌性髄膜炎の3例

相澤 悠太・金子 正儀・有泉 優子
佐藤 晶・五十嵐修一・山崎 元義

新潟市民病院神経内科

過去1年間で当院にて経験した肺炎球菌性髄膜炎の死亡例、後遺症を残した例、軽快例の各1例を報告する。

〔症例1〕生来健康な41歳、男性。発熱、意識障害にて発症。髄液検査の結果、細菌性髄膜炎の診断でICUに入院した。抗生剤、ステロイド療法を行ったが、脳浮腫の進行、脳血管障害の合併にて第10病日死亡した。

〔症例2〕SLEの既往を有する60歳、女性。発熱、関節痛で発症し、意識障害、項部硬直、右共同偏視が現れ、髄膜炎の疑いにて当科に入院した。脳血管障害を合併し、重篤な後遺症を残した。

〔症例3〕75歳、男性。発熱、頭痛、CK高値を認め、黄紋筋融解症の診断で入院した。その後、意識レベルの低下、髄液細胞数の増加を認め、髄膜炎の診断にて抗生剤、ステロイド療法を開始し良好な経過をたどった。

新たな抗菌薬や検査手法の開発にもかかわらず、世界的にみても細菌性髄膜炎の死亡率は依然として10～30%と高く、また重篤な後遺症の割合も高いままである。今年の4月に発行された細菌性髄膜炎診療ガイドラインについても触れ、若干の考察を加える。

13 Machado-Joseph病における睡眠呼吸障害の合併について

坂井 邦彦*、**・渡辺 健雄**

伊藤 実**・大平 徹郎**

長谷川有香***・谷 卓***

松原 奈絵***・小池 亮子***

新潟臨港病院内科*

国立病院機構西新潟中央病院呼吸器科**

同 神経内科***

【背景】孤発性脊髄小脳変性症のうち、最も頻度の高い多系統萎縮症では睡眠呼吸障害（SDB）の合併が多いことはよく知られており、突然死との関連性が報告されている。一方、遺伝性脊髄小脳変性症のうち、本邦で最も頻度の高いMachado-Joseph病（MJD）とSDBの合併についてはあまり知られていない。そこで、今回我々はMJDとSDBの合併について検討した。

【対象と方法】2004年11月から2007年4月までの間に西新潟中央病院で終夜睡眠ポリグラフ（PSG）を施行されたMachado-Joseph病患者10名について検討した。

【結果】年齢 52.6 ± 14.6 歳、BMI 16.1 ± 2.4 kg/m²（身長・体重測定不能4名、18.0以上は1名のみ）、初期症状発現からの経過 19.2 ± 5.9 年であった。失調性歩行障害は全例に、嚥下障害は7名、うち胃瘻増設は4名であった。PSGの結果はAHI 11.7 ± 14.1 /h（全例閉塞型優位）、覚醒指数 21.1 ± 15.6 /h、CT90% 4.8 ± 7.6 %、最低酸素飽和度 82.4 ± 6.8 %、PLMs 41.3 ± 93.2 /h（10以上は3名）、睡眠効率 52.5 ± 26.4 %であった（ $m \pm SD$ ）。AHI5以上のSDBは6名で、AHI30以上の重症が1名、AHI15以上の中等症が2名、軽症は3名であった。治療は重症の1例が気管切開となり、他は治療を希望しなかった。

【結語】痩せの割合が非常に高く、経過は平均19年と長く、大部分が嚥下障害を合併している。AHI5以上のSDBは6割にみられ、全てが閉塞型が優位であった。重症度別では重症は1例、中等症が2例、軽症が3例であった。睡眠時周期性下肢運動障害の合併が3割にみられた。治療は重症の1例が気管切開となり、CPAPやNPPVなどの